



ことばの創造性：主観性・対話性・多様性からのアプローチ

小松原，哲太
朴，秀娟
南，佑亮

(Citation)

国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 61:1-33

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487336>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487336>



ことばの創造性： 主観性・対話性・多様性からのアプローチ

小松原 哲太・朴 秀 娟・南 佑 亮

1. はじめに

Leech (1969: Ch. 2) によれば、ことばの創造性 (linguistic creativity) には2つの意味がある。1つは、ある言語において慣習化された言語表現を独自の仕方を使用するという意味であり、もう1つは、ある言語には存在しない新しい表現を創り出すという意味である。次の2つの突飛な表現のうち、(1) は前者の、(2) は後者の、ことばの創造性を例示している。

- (1) The polar bears of the Arctic ice-cap have recently taken to wearing false eyelashes as a protection against snow-blindness. (Leech 1969: 24)
- (2) Eins within a space and a wearywide space it wast ere wohned a Mookse. (James Joyce, *Finnegan's Wake*: 'Tales Told of Shem and Shaun,' in H. Levin (ed.) *The Essential James Joyce*, 1948, 524; cited in Leech 1969: 24)

本論文では、言語学と関連分野の視点から、(1) の意味でのことばの創造性を中心に論じる。(1) の創造性の一側面は、言語（この場合は英語）の規則に従っているにもかかわらず、ほぼ誰にも言われた・書かれたことがなかった表現である、という点にある。

生成アプローチにおける言語研究の射程は、さまざまな思考を表現できるという言語の創造的な側面にあった (Chomsky 1964)。しかし、このアプローチの限界のひとつは、ことばの創造性を、柔軟なコミュニケーションの運用能力

や使用文脈から切り離している点にある。山梨 (2009) は、認知言語学の視点から、「言語の創造性は、閉じた規則支配の創造性ではなく、規則の解体・変容のダイナミズムによって特徴づけられる開かれた創造性として見直していく」(ibid., 129) ことの必要性を訴えている。

文学テキストだけでなく、日常言語においても、ことばの創造性は広く発揮されることが近年の研究で指摘されている (Swann, Pope, and Carter 2011, Carter 2016, Maybin 2016)。すでに存在する表現をほんの少し変えるだけで、我々は創造的な存在になれる (土屋 2020: vi)。「創造」と聞くと、まるでゼロから新しいものを作らなければならないように思いがちであるが、我々が見聞きする創造的な表現の多くは、既存の表現をその場に合うように上手く利用している (Kecskes 2016, 2020, 小松原 2016: Ch. 5, Goldberg 2019: Ch. 4)。(2) のように、創造的な表現をゼロから創り出す機会は少ない。本論文では、言語の慣習を拡張することばの創造性に注目する。

新しいメッセージを伝えたいと願うとき、私たちは記憶された言語表現のリソースを超えて、ことばを創造的に使う (Goldberg 2019: 61)。特に、ことばの新しい特徴が生み出される背景には少なくとも、捉え方や視点を反映したことばの主観性 (Langacker 1990, 2006, 森 1998)、対話者への影響力を高めるレトリック (小松原 2016, Sobrino, Littlemore, and Ford 2021)、言語規範からの逸脱による多様性と変化 (金澤 2008, 金澤・川端・森 2021) が関係している。これらは慣習的な言語の記号体系を揺り動かす要因になっていると考えられる。

文学、言語学、応用言語学、文体論、社会言語学、コミュニケーション学、カルチュラル・スタディーズ、メディア研究、人類学、教育学といった分野で、ことばの創造性についての研究がなされてきた (Pope and Swann 2011: 1)。しかし、創造性を生み出す背景を多角的に探求する考察は十分にはなされていない。本論文では、ことばの創造性に関わる言語研究の知見にもとづき、主観性、対話性、多様性という3つの視点から、言語の慣習を拡張することによって生み出される創造的な言語表現の性質を考察し、ことばの創造性の背景を明らかにすることを試みる。2節から4節の各節では、この3つの視点から創造性という捉えがたい言語現象の異なる側面に焦点を当てる。2節では、英語の構文現

象に関する認知言語学の知見にもとづき、捉え方の有標性と創造性の関係を論じる。3節では、英語における隠喩のフレーミング機能を取りあげ、レトリックの効果と創造性の関係を論じる。4節では、日本語における学習者の誤用に注目し、規範からの逸脱と創造性の関係を論じる。

2. ことばの主観性から見る創造性

言語は本来的に話者が使用するものであるため、言語表現には、様々な形で、様々な程度に「話者の関与 (speaker-relatedness)」が反映される。言語表現に反映される話者の関与にも複数の類型が認められる (小柳 2022) が、ここでは (A)「話者が生み出すもの (概念構造・言語行動)」と (B)「話者自身の存在」の二種類に注目する。(A) と (B) が言語的に反映されることをいずれも主観性 (subjectivity) と呼んだ場合、主観性は、「慣習からの逸脱としての創造性」(以下、「創造性」とどのように関わるだろうか。

(A) に関わる主観性に伴う創造性については、「特定の言語形式を、本来よりも主観性の度合いの高い意味で用いるようになる過程で話者が行うこと」と捉えることができる。これは Traugott (1982, 1989) を嚆矢とする意味変化・文法化の研究において特に注目されてきた、主観性のあまり伴わない意味を表していた言語項目が次第に主観性を帯びた意味が加えていくという主観化 (subjectification) と呼ばれるプロセス (Traugott 1995, 2003, 2010) と密接に関わっている。Traugott の一連の研究によれば、主観化という意味変化のプロセスは、特定の文脈における個々の話者による種々の言語的行動から引き起こされる (Traugott and Dasher 2002)。そこには、話者のそのような行為が新たな意味を生み出していくという意味での創造性に関わっている。

これに対し、(B) に関わる主観性は、特定の場面を描写する時に、話者がより主観的な捉え方 (construal) とより非主観的な捉え方を使い分ける能力に関わる。ここでの「主観的」な捉え方とは、場面に参与者として存在する話者を言語的には表現しない (あるいは「ゼロ形」で表現する) ことを指し、非主観的な捉え方は、そのような話者を言語的に表現することを指す。このような2つの描写方法のうち一方はさまざまな意味で「有標」の地位にあり、もう一方の

描写方法にはない固有の含意や効果が伴うことがある。日本語の一例を挙げると、話者が自らの感情経験を述べる場合は「悲しい(なあ)」というように話者自身を主観的に捉えた表現が無標であるが、話者自身を非主観的に(客観的に)捉えた「私は悲しい」や「私が悲しい」という表現は有標であり、特殊な表現効果(森 1998: 190)が生み出される。この場合、話者があえて有標の表現を選択して使用するところに創造性が生じていると言える。

以下、本節では、上記の (B) が関わる主観性に関する先行研究で盛んに議論されてきた英語の一人称の(非)言語化に関する表現のペアを取り上げ、捉え方の有標性に伴う創造性の観点から検討する。

2.1 主観性と言語構造

Langacker (1990, 1998, 1999, 2006) は、主観性が、言語使用者による事態・状況の「捉え方」にとって重要な位置を占めるという観点から、主観化(subjectification)という認知プロセスを提唱している。Langacker の定義する主観化は先述の Traugott による同じ呼称の概念とは異なり、「概念化の主体(subject of conception)と概念化の対象(object of conception)の明確な区別(対立)が失われていくプロセス」を表す。この主観化は本節冒頭で述べた (A), (B) のどちらの主観性にも関わる説明概念である(上原 2016; 本多 2016)が、ここでは後者の方に関わる実例を見ていくこととする。

たとえば、(3) の a と b は、話者から見てテーブルを挟んだ向かい側にヴァネッサが座っているという同一の状況に対する二つの表現方法を表している。

(3) a. Vanessa is sitting across the table from me.

b. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990: 20)

(3a) では、話者は事態の概念化者であるだけでなく、ヴァネッサの向かい側に座っている人物という、描写されている事態内の参与者として概念化の対象の一部にもなっているため、主体と対象の対立が認められる。一方 (3b) では、話者は概念化の主体であり描写されている事態内の参与者であるはずだが、(3a)

の場合とは異なり、事態の一部であるにもかかわらず話者自身は、概念化の「対象」の側に含まれないため、言語的に明示されていない。この点で概念化の対象と概念化の主体の対立の程度は (3a) よりも低い。したがって、(3b) の方が (3a) に比べて主観性の高い (Langacker の理論では「主観性のより進んだ」) 捉え方を反映している¹。このように Langacker の議論は基本的に、話者 (一人称) を言語化する場合としない場合の捉え方を行き来できるという認知主体としての話者の“能力”とそれぞれの捉え方に動機づけられた表現の意味の差異自体に注目している。その一方で、両者の間の差について有標性の観点から探るといふ視点は持ち合わせていない。

これに対し池上 (2006, 2011) は、同じく (B) の主観性に関わる話者の能力に注目してはいるものの、言語間で見られる好まれる表現方法の差異に着目している点で Langacker とは一線を画している。具体的には、英語とは異なり、日本語は話者 (一人称) を言語化しない捉え方、たとえば (3) の例ならば b の方に該当するような、より主観的な捉え方 (池上の用語では「主観的把握」) を好む傾向のある言語であることが強調される。池上の見解は、(B) の主観性に関する類型論的研究 (上原 2016) とも密接に関わっている。

本節の議論にとって最も関連が深い研究が、森 (1998, 2012) である。森 (1998) は、Langacker の主観化 (森の訳では「主体化」) に有標性の概念を取り入れた上で、英語は話者を言語化するのが無標であり、話者を言語化しないというより主観性の高い表現方法を取るのが有標であるのに対して、日本語は話者を言語化しない主観的な捉え方が無標であり、話者を言語化する方が有標であると指摘している (したがって森の理論では日本語の場合は英語とは逆方向のプロセスである客体化 (objectification) が想定される)。この考え方にに基づき、森 (2012) は、日本語で敢えて一人称を多用することと修辭的效果を結びつけた分析を提示している。森の一連の研究は、一人称の表現可能性に関する言語ごとの傾向に着目するのみならず、同一言語内で、その言語の一般的傾向と逆行する表現方法を取り入れる場合も射程に収めている点で注目に値する。

2.2 主観的体験の共有を伴う現象

英語は描写対象となる状況に参加している一人称を表現するのが無標であるという森 (1998) の一般化は、一人称が表現される文法的環境を、規範的文法形式の文における「主語」に限れば、妥当性が高いといえる。(4a) と (4b) を比べると、使用される場面が後者の方が限定的で、くだけたスタイルに限られる。加えて、後者の方には、聞き手に自分の立ち位置から同じプロセスを捉えてもらいたいという共感を誘う含みも伴う。

(4) a. I hope not.

b. Hope not. (Langacker 1985: 138)

文法的に見ても、(4b) は「主語は原則として表現する」という英語の規範的 (canonical) 構造から逸脱している。くだけたスタイルは規範的な文法からの逸脱と連動しやすいことも考え合わせれば、(4a) に対して (4b) の方が有標な選択肢であることは明らかである。しかし、英語において、一人称の表現をしないこと自体に常に文法的な逸脱が伴うわけではないのもまた事実である。一人称を表現・非表現のどちらも (4b) のような文法的慣習からの逸脱はなく、かつどちらが有標の表現かが容易には見定められない場合もある。例えば Langacker (1985) は (5) のペアを取り上げ、その用法の違いについて興味深い観察を提示している。

(5) a. There is snow all around me.

b. There is snow all around. (Langacker 1985: 138)

(5a) と (5b) はいずれも、辺り一面に雪であるという話者自身の知覚体験（おそらく遠方にいる）聞き手に向かって伝達する表現であり、around の補部として一人称 me を表現するか否かは、単純な視点（または立ち位置）の取り方の問題のようにも思われる。しかし、両者にはそれ以上の違いがある。Langacker (1985: 139) は、(5a) と (5b) の2つの違いを、それぞれに適した (6), (7) のよ

うな架空の文脈を用いて説明している。

- (6) I am in the middle of a large crater. It is approximately a kilometer in diameter. *There is snow all around me*, to a depth of about 10 centimeters. There is a thin crust of ice on the upper surface of the snow, except in the vicinity of the larger boulders.
- (7) What a glorious day! The sun is shining, the sky is blue, and the scenery is spectacular. *There's snow all around*, as far as I can see, and no smog at all. I feel great! Wish you were here.

(6) は、別の惑星に到着した宇宙飛行士が宇宙船の周囲の探索を始める際に、客観的に、訓練を受けた方法にしたがって淡々と、その場の状況について無線で報告しているセリフである。一方 (7) は、休暇でスキーを楽しみに来た人がゲレンデの上から友人に充てて書いた絵葉書の文面である。(6) と (7) それぞれで用いられている (5a) と (5b) を入れ替えても不適格ではないものの、この使い分けの方が自然であるという。

この観察から読み取れることは、個人的な体験を情報の受け取り手と共有しようとする場合には一人称を表現しない (5b) の方が適している、ということである。一人称を顕在化すると、その体験内容を話者（報告者）自身に限定することになるが、一人称を非顕在にすることで、聞き手が同じ情景の迫体験することが容易になるからである。一人称を省略すると聞き手の共感（体験共有）を誘うという効果が伴うことは (4) と共通している。(4) と異なるのは、(6) と (7) を比較した時に、(5b) が (5a) に対して有標の地位にある表現とは言いがたいことである。それどころか、(6) が訓練を受けたプロによる報告であり、機械的で無機質な報告という含意が伴うことを考えれば、一人称を明示化する (5a) の方が有標と捉えることすら可能である。このように (5) の対立は「英語は一人称を明示するのが無標」という一般化だけでは上手く捉えられない現象であり、何らかの別の観点が必要となる。

2.3 構文的意味と有標性

ここで、(5) の2つの表現がどちらも存在の *there* 構文の事例であるという事実の方に注目してみたい。*there* 構文にも一定の意味機能が慣習的に結びついているとすれば、(5a) と (5b) の間の明確な意味の対立にはこの構文の意味が関与している可能性も検討する必要がある。この点で、(5) と同じく *there* 構文を使った例 (8) に関する Langacker (1985: 140) の観察は示唆に富む。

- (8) [Demitri was trudging through the woods.]
 a. There was a clearing ahead of him.
 b. There was a clearing ahead. (Langacker 1985: 140)

文学作品などで先行文脈 (*Demitri was trudging through the woods.*) があつた場合、(8b) は登場人物 (Demitri) の主観的な視点と体験を描写することができるが、(8a) の場合は、登場人物の移動を客観的に捉えているため、登場人物が空き地 (a clearing) の存在にまったく気付いてない場合も使用可能だという。

ここで仮に、*there* 構文に慣習的に「誰かの主観的な観察内容を聞き手(読み手)と共有する」という意味機能が結びついているとする。すると (8a) は、誰か (この場合は話者＝語り手) が観察した内容の中に登場人物の存在が含まれることにより、登場人物が観察者とは切り離される。そのため、あくまでも聞き手(読み手)は外側から事態を見ていることになり、登場人物の体験を共有することはない。それゆえ、描かれる状況が登場人物の体験していないことであっても良い。一方 (8b) の場合は、登場人物が観察内容に含まれないため、登場人物を観察者側と同一化し、聞き手(読み手)も登場人物の主観的視点・体験を共有することが可能となる。

実はこれと同様のことが (5a) と (5b) の対立でも起こっていると推定できる。つまり (5a) では、観察内容に一人称「私」が含まれることで、(8) での登場人物 (Demitri) にあたる「私 (me)」が観察内容に含まれるため、観察者と登場人物は切り離される (ただし観察者と登場人物が同一人物であるため、(8a) の場合のように登場人物が雪の存在を認識できていないという可能性は排除される)。こ

のとき聞き手は、登場人物としてではなく観察者としての話者の観察内容は共有できるが、場面の登場人物としての話し手の体験が共有できないことになる。(5b) では、そのような話者の二つの役割の「切り離し」が起こらないため、聞き手は登場人物としての話者の体験を直接共有できる。このような理由で、景色を見た感動をより直接伝えたい場合に話者は (5a) よりも (5b) を使うのである。

ここから推測できるのは、話者による当該の 2 つの表現方法の使い分けには、話者が自身 (一人称) の存在を言語化するかどうかという単純な問題だけでなく、一人称の (非) 表現と特定の文法構文の意味との相互作用も関わっているということである。確かに、存在物を知覚する時の参照点としての一人称を顕在化させるよりも非顕在にした方が there 構文の意味機能により適合しているとすれば、敢えて顕在化させた (5a) の場合に伴い得る特殊な含意にも説明がつく。この点で (5a), (5b) の対立は、(4a), (4b) の対立とは明らかに性質が異なっている。

以上を踏まえて再び 2.2 節の問題に戻ると、(5) の対立についての妥当な記述は「存在の there 構文の事例としては、存在物を位置付ける参照点としての一人称は非顕在である方 (= (5a)) が無標であり、顕在化する方 (= (5b)) がむしろ有標な表現となりうる」といったものになるだろう。このように、従来のように一人称の有無のみに注目している限りは英語の一般的傾向にはそぐわないように見える事実、一人称の (ゼロ形) 表現を含む構文 (存在の there 構文) の意味の有標性に帰着できるというわけである。確かに、there 構文は焦点構造などの点で規範的 (canonical) 文構造である主語・述語構造を持つ構文 (4) などとは異なる性質を示す有標構文の特徴を示す (Lambrecht 1994, 2000) という事実を考慮すれば、これは十分に考えられることである。もしこの考え方が正しいとすれば、「英語が一人称の言語化をするのが無標である」という一般原則には、「無標の構文 (主語・述語構造) の場合に当てはまり、有標構文 (there 構文など) であればその限りではない」という条件が加わることになるだろう。もちろんこれらは現段階では仮説にすぎず、上で見た there 構文の実例と、同じように参照点としての一人称を含む空間的位置表現である (3) のタイプの表現の特徴とを詳細に比較するなど、検証すべき事柄は残されている。しかしいづれにせよ、一人称の使用・不使用の対立と構文の意味との相互関係は、さらに追

究していく価値のある問題であると思われる。

なお、一人称を非明示にした方が有標であるという一般化が当てはまらない現象は、存在の *there* 構文に限定されるものではない。

(9) a. I remember switching off the light.

b. I remember myself switching off the light. (Lyons 1982: 107)

(9a) と (9b) を比べた場合、自身の体験を思い出す表現としては (9a) の方が普通であり、一人称を顕在化させた (9b) の方が特殊な意味を伝達する。これも (5) の場合と同様に、動詞 *remember* を中心とした構文レベルの意味を加味した分析が可能な現象である。

本節では、英語の事例を題材とし、話者（一人称）を表現するか否かという「捉え方」としての主観性に関する言語表現の選択において、有標の捉え方を反映する表現を話者が選択することで創造性を発揮するプロセスについて検討した。英語は一人称を顕在化させる方が無標であり、非顕在にするのは有標であり特殊な効果が伴うという一般化 (森 1998) は、規範的な主語・述語からなる文構造における主語位置での一人称表現を想定する場合には当てはまる一方、その他の環境では必ずしも当てはまらず、存在の *there* 構文のように構文自体が有標の捉え方を反映している場合は、むしろ一人称を顕在化の方が有標となることもありうることを見た。これはすなわち、捉え方としての主観性に関わる表現の有標性と「一人称を表現するか否か」という二項対立とは密接な関係にあるが、その有標・無標の分布はその一人称の（非）表現に関わる構文的環境との相互作用によって変異しうる、ということである。そのような相互作用から創出される多様なタイプの有標的表現を選択するプロセスにおいて、話者の創造性は発揮されているのである。

3. ことばの対話性から見る創造性

誰でもない人が誰でもない人に、何の話でもないことを話すことはできない。ことばの創造性の多くは、ある人がある時ある人にあることを話すという、こ

とばのコンテクストを具現化するプロセスに関わっている (Tusting and Papen 2008; Jones 2016)。このような言語の対話性は、1対1の対面会話に限らず、言語コミュニケーションの普遍的な性質であると言ってよい。

ことばの創造性の議論のなかで特に興味深いのは、「話すこと、あるいは書くことの通常の方法 (ordinary mode) からの巧妙な逸脱」(Corbett and Connors 1999: 379) をともなう創造的な文彩 (figure of speech) の表現が、詩的言語に限られたものではなく、日常言語でも広く用いられるという指摘である (Jakobson 1960; Lakoff and Johnson 1980; Cameron 2011; Semino 2011; Pope and Swann 2011; Dancygier and Sweetser 2014; Carter 2016; 山 梨 2016; Sobrino, Littlemore, and Ford 2021)。隠喩、直喩、換喩、暗示引用、誇張、洒落、言葉遊び、反復、造語法などの文彩は、対話のなかで言語の効果を引き出す創造的な表現法として注目されてきた (Carter 2016: Ch. 4)。本節では、対話のなかで強い効果をもたらす文彩のなかで隠喩を取りあげ、病気を表現する隠喩のフレーミング機能の研究の知見を通じて、文彩によることばの創造性を考察する。

3.1 文彩による経験のフレーミング

伝統的な修辞学では、文彩はテキストに特別な審美的価値を与えるものであると考えられてきたが、認知言語学の研究によって、文彩は言語の装飾をはるかに超えた重要な役割を担っていることが明らかになった (Lakoff and Johnson 1980; Dancygier and Sweetser 2014)。特に、概念メタファー理論 (conceptual metaphor theory) として知られる隠喩研究の潮流では、隠喩が経験、思考、行動に影響することが多角的に論証されている (Lakoff and Johnson 1980; Gibbs 1994; Kövecses 2010)。

隠喩は、隠喩が私たちの生活のなかで経験することにさまざまな意味を与え、それを表現し、伝達する。隠喩は、ある概念の特定の側面を、別の概念の観点から強調し、その概念の他の側面を覆い隠す。この隠喩の中心的な機能は、フレーミング (framing) の概念との関係で論じられてきた (Burgers, Konijn, and Steen 2016; Boeynaems *et al.* 2017; Semino, Demjén, and Demmen 2018)。

フレーミングとは、「現実認識のいくつかの側面を選択し、コミュニケーションのなかでその側面に際立ちを与えることで、ある問題を定義し、因果関係の解釈、倫理道徳的な評価、解決方策の方針を誘引すること」(Entman 1993: 52)であり、隠喩は、例証、キャッチフレーズ、描写、視覚イメージなどとともに、フレーミングの修辭的装置と位置づけられてきた (Gamson and Modigliani 1989: 3)。

隠喩によるフレーミングは、認知言語学の隠喩理論と合流し、近年、隠喩の創造性にかかわるさまざまな興味深い論点を提起してきた (Charteris-Black 2006; Burgers, Konijn, and Steen 2016; Boeynaems *et al.* 2017; Brugman, Burgers, and Steen 2017; Musolf 2017; Brugman, Burgers, and Vis 2019; Burgers and Ahrens 2020; Wicke and Bolognesi 2020; Komatsubara 2023, to appear)。例えば、Semino, Demjén, and Demmen (2018) は、隠喩が重病患者の経験のなかで重要な役割を果たしうるとし、イギリスのガン患者向けのウェブサイトに掲載されたテキストから構築されたコーパスを用いて、以下の(10)から(15)のような事例から戦い(war)の概念メタファーのフレーミング機能を分析している。英語の事例の斜体は、文彩の焦点となる部分を示している。

- (10) It's sad that anyone, but especially younger people like yourself, find themselves with this *battle* to *fight*.
- (11) I feel such a failure that I am not *winning* this *battle*.
- (12) But the emotional side of cancer and of BC [breast cancer] in particular is the real *killer*—it *strangles* and shocks your soul.
- (13) I'm new to the forum and wanted to know if there are any other younger bowel cancer *fighters* amongst us.
- (14) Also it [the online forum] allows me to leave a record for my family, showing them how much I love them and how much I am *fighting* to stay with them for as long as possible.
- (15) Your words though have given me a bit more of my *fighting* spirit back. I am ready to *kick* some cancer *butt*!

(Semino, Demjén, and Demmen 2018: 633–634)

これらの隠喩は、すべて一貫して病気の経験を戦いとしてフレーミングしている。患者は明示的に戦士として位置づけられており、病気は敵対する相手であることが暗示されている。治療や延命は勝利であり、回復しないこと、死ぬことは敗北である。これらの表現はすべて、危険と困難に立ち向かう勇気が必要であることを示唆しており、病気の経験の理解と伝達をフレーミングしている。

しかし、患者と病気の関係がすべて同じというわけではない。(10) (11) (12) では、患者の負の感情が表現されている。例えば (11) では、治療が上手く進んでいないことは「戦いに勝てない」ことであり、患者である書き手にとってはそれが「失敗」であるように感じられている。これに対して (13) (14) (15) では、患者の主体性と困難な状況に立ち向かう決心が表現されており、書き手は自らの努力に自尊心を感じていることが読み取れる。

このように、隠喩によるフレーミングは、主体性、評価、情動に影響を与え得る。このような思考、認識、感情への影響力は、隠喩によって持ち込まれた戦いについての慣習的な知識がなければ存在しなかったものである。この点で、隠喩は、困難な経験を別の経験から捉え直すことで、その経験に新しい意味を与える機能をもっていると言える。

3.2 文彩がもたらす解釈主体への効果

隠喩は、伝達する主体だけでなく、それを伝達する相手の情動にも影響を与える。Hendricks *et al.* (2018) は、以下の2つのテキストを比較して、隠喩のタイプによる情動反応の差を検証した。(16) はガン治療を戦い (battle) として、(17) は旅 (journey) としてフレーミングしている。被験者はテキストを読んだ後で、Joe のガンの経験に関して、「もし回復しなかったとすれば彼はなすべきことを果たせなかったことに罪悪感を覚えるだろう」「彼は病気の経験に折り合いをつけることができるだろう」という2つの陳述にどの程度同意できるかをそれぞれ評価した。その結果、旅よりも戦いによってフレーミングする方が、患者が回復しなかったことに罪悪感を覚えるだろうと推論する傾向があることが分かった。

- (16) Joe was just diagnosed with cancer. He knows that for the foreseeable future, every day will be a *battle against* the disease. The *battle* he has to *fight* will not always be an easy one. Many people have written about their experiences on the *battlefield*, and he can turn to those for consolation. His friends and family want him to know that he will not be alone in his *battle*. Even though sometimes he might not feel like talking, other times he may want to share stories of his *battle* with others, and they will be there for those moments.
- (17) Joe was just diagnosed with cancer. He knows that for the foreseeable future, every day will be a *journey with* the disease. The *road* he has to *travel* will not always be an easy one. Many people have written about their experiences on the *path*, and he can turn to those for consolation. His friends and family want him to know that he will not be alone on his *journey*. Even though sometimes he might not feel like talking, other times he may want to share stories of his *journey* with others, and they will be there for those moments.

(Hendricks *et al.* 2018: 270; 斜体は原文では引用符による強調)

ある隠喩が持ち出されると、残りの話はすべてその隠喩の視点から解釈されることがある (Hertog and McLeod 2001: 148)。上記の2例では、第2文で隠喩のタイプが明示され、その後、そのタイプと整合性がある語句が一貫して使用されている。興味深いのは、隠喩は明示的に新しい情報を提示するわけではないのに、ある事柄の解釈に影響するという点である (Tewksbury and Scheufele 2020: 57)。Hendricks らの研究は、異なる隠喩が、たとえ同じ人の同じ病気の経験を表すものであっても、その経験の解釈に影響を与えることを示しており、隠喩による異なる意味づけがコミュニケーションの相手の情動的评价を変化させる機能をもつことを示している。

3.3 新しい意味を生み出す文彩の選択

話し手や書き手は、ある経験をフレーミングするために何の隠喩を用いるかを選択することができる。3.1節、3.2節では、病気の経験をフレーミングする戦いや旅の隠喩の例を考察した。これらはよく用いられる慣習的な隠喩であるが、つねに最良の選択肢であるというわけではなく、病気を表す隠喩は他にもあり得る。

例えば、2020年から数年間にわたり世界的に流行した新型コロナウイルスの経験をフレーミングする隠喩に関しては、戦いの隠喩が心理的、社会的、政治的に問題の多い帰結をもたらす可能性が指摘されている (Bates 2020; Semino 2021; 小松原 2022)。Olza et al. (2021) は、新型コロナウイルスの戦い以外の隠喩を収集する #ReframeCovid 構想の成果として、旅（水、道、山、空、ジェットコースター、列車）、スポーツ（レース、サッカー、バスケット、クリケット、卓球、ラグビー、野球、ゴルフ）、自然（嵐、火、雪崩、津波、火山噴火、洪水、ハリケーン）、人や動物、ゲーム、宗教、教育、映画などの隠喩が Twitter 上で用いられていたことを明らかにした。これらの隠喩は、コロナ禍に対する異なる認識を生み出し、戦いなどの慣習的なフレーミングから脱するための創造的な表現として解釈できる。

- (18) [...] the way that you stop a disease spreading is in the same way as if we have a *forest fire* and we want to stop the *fire*, *pouring water* on it immediately where the *fire* is doesn't actually work, you've got to get *downwind* of the *fire* and you *rob* it of *fuel*, you create a *fire break* by *cutting the trees down*, so what that translates to in human terms is you know where the activity is, you stop those people transmitting, you stop them moving and giving it to other people, so you cut off the supply of *fuel* and *oxygen* to the *fire*[.] (Chris Smith, *The World Tonight*, September 30, 2020, BBC Radio 4; Semino 2021: 55; 斜体は筆者)

#ReframeCovidの運営メンバーの一人であるElena Seminoは、とりわけ(18)のような火の隠喩が有効であると述べており、火の隠喩がもつ柔軟かつ創造的な機能として以下の点を指摘している (Semino 2021)。

- ・ 危険と緊急性を伝える
- ・ コロナ禍が進行する段階の区分を示す
- ・ どのようにウイルスが伝染し、伝染のなかで個々の人間がどのような役割を担うのかを明らかにする
- ・ 感染拡大を抑えるための対策を明らかにする
- ・ 医療関係者の役割を示す
- ・ 医療機会の不平等などの諸問題とコロナ禍を関係づける
- ・ ポスト・コロナ禍の未来を描き出す

(Semino 2021: 54; 日本語訳は筆者)

このなかでも特に、(18)の事例では、感染拡大対策（移動を控え、接触を避けること）が山火事の延焼対策との対応で説明されている。このように、隠喩はある事柄について新しい認識を示すというだけでなく、具体的な行動の指針の決定などにも影響し得る。

人びとはつねに最善の結果を得るために、どのような表現を用いるかをコンテキストに沿って吟味することができる。その場合は、慣習から逸脱した表現法も創造的な表現法として認められる。なぜならば、そのような文彩の表現は、特別な効果をもつからである。特に、隠喩は新しい認識、感情、推論、評価、行動を創造する。この隠喩における語の慣習的な意味から創造的な意味への変容は、対話における言語の効果というコミュニケーション上の動機づけから生じているのである。

4. ことばの多様性から見る創造性

「ことばの多様性」と言うと、複数の民族や文化が共存する国・地域において、複数の公用語や共通語が共存している状況を思い浮かべるかもしれない。しか

し、言語変種 (language varieties) や言語変異 (language variation) とされているものまで広く「ことば」として捉えると、「ことばの多様性」はあらゆる国・地域において多かれ少なかれ存在する。例えば、「単一民族・単一言語」の国のように見える日本でも、「方言」とも呼ばれる、数々の地域的変種が存在し、「若者ことば」「女ことば／男ことば」のような、世代や性別等、個人の属性によって異なる、社会的変種が存在する。また、「ら抜きことば」(例：見れます、来れます) や、肯定述語と共起する「ぜんぜん」(例：ぜんぜんいい) のような、変異として扱われる言語形式まで考慮すると、「日本語」として一括りで呼ばれるものであっても、その姿は実に多様である。

上記のうち、変異として扱われる言語形式は、ことばの「ゆれ」や「乱れ」のような用語のもと、しばしば、「規範」から逸脱した「逸脱表現」と見なされる。様々な観点から日本語に見られる逸脱と変化について考察を行っている金澤・川端・森 (2021 : iii) には、次のような記述が見られる (下線は筆者による)。

言葉には「誤用」「ゆれ」「新語」などとして注目される語句や形態や用法、表記や音声のゆれなどの現象がある。これらは従来の規範やルールから逸脱しているためにこのような呼び方をされ、ときに批判されたり珍しがられたりしてきた。これらの中には一時的なブームとしていつの間にか消えていくものもあるが、一方で、社会に許容されて定着していくものもある。(中略)

このような表現の産出は、言葉が新しい意味用法や機能を獲得する場合のプロセスの一端を示しているともいえる。これまでに生じた言語変化のうちで定着してきたものは、われわれに変化の要因を読み解くヒントを与えてくれる。また、今起こっている変化がこれからの日本語について予測するヒントを与えてくれることもあるかもしれない。(後略)

下線部の、いわゆる「逸脱表現」の産出が言語変化のプロセスの一端を示しているというのは、「逸脱表現」というのが、その使用において規則性があり、新しい表現を創造するものであることを意味する。

多様であるのは、日本語母語話者 (以下、「母語話者」とする) による日本語

に限った話ではない。日本語学習者（以下、「学習者」とする）による日本語も多様な姿をしている。同じ語句であっても、学習者の母語や日本語習熟度によって産出される形は様々であり、外国語としての日本語なのか第二言語としての日本語なのかなど、学習環境によっても産出される日本語は多様である。また、母語話者にとって「規範」となっている用い方から逸脱した日本語は、学習者による「誤用」と呼ばれ、分析や考察の対象となることも多い。しかし、学習者の「誤用」と呼ばれるものの中には、その現れ方において規則性をもつものがあり、先に述べた、母語話者の間では「ゆれ」や「乱れ」とされる日本語に見られる規則性と通ずる特徴をもつことがある。本節で取り上げるのは、そのような特徴をもった学習者による「誤用」である。学習者による日本語の「誤用」と、母語話者の間で「ゆれ」や「乱れ」とされる日本語の使用において共通して見られる規則性は、のちに「規範」となりうる可能性を潜めている。そのことに注目して、本節では、母語話者による日本語だけでなく、学習者による日本語も、日本語の多様性の一側面を表すものとして見なし、学習者による「誤用」を軸に、多様性に見られる創造性について論じてみたい。なお、本節でいう「規範」とは、当該の言語において文法的に正しいとされる使い方を指す。

4.1 日本語学習者による「誤用」

学習者の日本語に見られる「誤用」は、音声、語彙、文法、言語行動といった、ことばのあらゆる側面において観察される。本節では、このうち、語彙と文法の両方に関わる品詞である副詞の「誤用」に注目する。

副詞は、活用をせず単独で用言またはそれに準ずる語句を修飾することを基本的な機能とする。語形変化をしないことから、副詞の語彙の意味さえ適切に捉えられていれば、動詞や形容詞のように活用を伴う品詞と比べて、一見、習得が容易であるように思える。しかし、副詞の習得は必ずしも容易ではなく、学習者によって使用される副詞には偏りがあることや、習得そのものが難しい副詞があることが、従来の研究において指摘されている（川口・佐々木 1996, 小寺 2001, 渡辺 2010, 塚田 2017, 朴 2020 など）。

産出面に注目すると、学習者による日本語において、程度や量を表す副詞は、

日本語習熟度にかかわらず、出現しやすい(渡辺 2010, 朴 2020)。しかし、必ずしも正しい使い方であるとは限らない。例えば、「たくさん」は、「大勢」や「いっぱい」のような副詞と並んで、数量を限定する「量の副詞」であるが(仁田 2002)、市川(2010)では、学習者によって産出された「たくさん」について、次のような、様々なタイプの「誤用」が示されている。(例は、市川(2010)より抜粋。括弧の中に、市川(2010)で示されていた正用例を併せて示す。なお、市川(2010)では、正用例の提示において、「たくさん」以外の部分についても正されていることがあるが、ここでは省くこととする。また、下線は筆者による。)

- (19) たくさん (→ゆ) 日本語の実力の高くなるには、大勢の人々と語り合うことが役立ちになります。〈韓国〉
- (20) 私の小学の時、あり、いい学生じゃなかった。いつもたぐさ (→たくさん) 悪いことをした。〈インド〉
- (21) にほんごのことばはたくさん (→あまり) わからないから、いまいつしょけんめいにべんきょうしています。〈中国〉
- (22) 香港では、学校の規則がきびしくて勉強宿題もたくさんある。よい学校と大学を入学するために、たぐさん (→十分／よく) 勉強しなくてはならない。〈中国・香港〉
- (23) 最近たぐさん (→よく) ニューミュージックを聞きます。〈アメリカ〉
- (24) たぐさん昔サンパウロにあった (→昔サンパウロにたくさんあった) 工場はいなかへ引越されました。〈ブラジル〉
- (25) たばこの販売店がたぐさんが (→たくさん) ある。〈中国〉

市川(2010)では、(19)を「付加(使用してはいけないところに使用している誤用)」の例として、(20)を「誤形成(形態的な誤り)」の例として、(21)(22)(23)を「混同(他の項目と混同していることによる誤用)」の例として、(24)を「位置(文中での位置がおかしい誤用)」の例として、(25)を「その他」の例として挙げている。このうち、(21)(22)(23)の「誤用」は、「たくさん」の語彙の意味よりも、「たくさん」が使われる構文的環境に対する理解が足りないことに起因

する「誤用」と見ることもできる。(21)は、「たくさん」が否定述語とは用いられにくいことが理解できていないことによる「誤用」であると考えられ、(22)(23)は、共起する述語のタイプや使われ方への理解が足りないことによる「誤用」であると考えられる。このように、「たくさん」一つをとっても、様々なパターンの「誤用」が見られる。

4.2 日本語母語話者による「規範」と使用実態

日本語において、「たくさん」が限定するのは、主体や対象の量(26)(27)、または、動作の量である(28)。

(26) 駅前に人がたくさんいる。

(27) 水をたくさん飲む。

(28) 今日はたくさん歩いた。

影山(1993: 54-55)には、「たくさん」の解釈と関連して、次のような記述が見られる。まず、単に「たくさん」と動詞だけを並べた場合、(29)のように、他動詞と共起すると、対象の量(影山(1993)では「目的語の数量」)を示し、主体の量(影山(1993)では「主語の数量」)を述べるものではないとする。そして、(30)のように、主語が他動詞の目的語に相当する非対格自動詞と共起する場合は、関与する事物、すなわち、主体の量を表すと説明する。一方で、(31)のように、主語が動作主である非能格自動詞と共起する場合は、主体の人数ではなく、動作の量(影山(1993)では「行為の量」)を表すとしている。ただし、非能格自動詞であっても、「たくさん遊んでいる」のように、述語がシテイル形のものや、意図的な移動を表す「行く、来る、帰る」と共起した「たくさん行った／来た／帰った」のようなものは、主体の量を指示することもできるという。((29)(30)(31)は、影山(1993)より抜粋。下線は筆者による。)

(29) たくさん飲んだ＝飲んだ量がたくさん、≠飲んだ人がたくさん

(30) たくさん産まれた＝産まれた子供がたくさん

(31) たくさん遊んだ＝遊んだ量がたくさん、≠遊んだ人がたくさん

このように、「たくさん」が表す量は、主体、対象、動作に関わるものであり、それは、基本的に、動詞のタイプによって決まることが、「たくさん」の解釈をめぐる母語話者の間で共有された「規範」とであると言える。

しかし、実際の使用実態に注目すると、母語話者による「たくさん」の使用は、主体の量、対象の量を表すものに集中する。表 1 は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) から用例を収集し、「たくさん」の意味用法別に分類したものである。なお、BCCWJ からは、収録されているデータのうち、①「出版・新聞」、②「出版・書籍」、③「図書館・書籍」、④「特定目的・ベストセラー」、⑤「特定目的・国会会議録」の 5 つからデータを収集している。また、書籍 (②③④) の出版年は 2000 年以降のものに限定している。

表 1. 「たくさん」の使用実態

レジスター 意味用法	新聞	書籍 (文学)			国会 会議録	合計
		地の文	会話文	その他		
主体の量	27 (64.2%)	131 (73.6%)	105 (64.8%)	55 (63.2%)	127 (84.7%)	445 (71.9%)
対象の量	13 (31.0%)	39 (21.9%)	42 (25.9%)	26 (29.9%)	20 (13.3%)	140 (22.6%)
動作の量	2 (4.8%)	8 (4.5%)	15 (9.3%)	6 (6.9%)	3 (2.0%)	34 (5.5%)
合計	42 (100%)	178 (100%)	162 (100%)	87 (100%)	150 (100%)	619 (100%)

仁田 (2002: 192) でも、「量の副詞」の中心的な働きは、主体や対象の個体の数量限定であり、動作の量限定ではないとされており、(31) のような、動作の量を限定する「たくさん」の使用は、規範的ではあっても、実際の使用においては周辺的であると言える。

4.3 日本語学習者の使用に見る「規範」とのずれと創造性

市川 (2010) で挙げられている、(32) ((22) を再掲)、(33) のような、「たくさん」は、母語話者の「規範」に基づいて考えると、成立してもよさそうなもの

である。「勉強する」という動作の量を示していると見ることができるからである。

- (32) 香港では、学校の規則がきびしくて勉強宿題もたくさんある。よい学校と大学を入学するために、たくさん (→十分／よく) 勉強しなくてはならない。

〈中国・香港〉

- (33) 最初は漢字を全然書けなかったが、たくさん (→ ϕ) 勉強して、練習してだんだん少し書けるようになった。〈アメリカ〉

実際に、動作の量を表す「たくさん」は、主体や対象の量を表す「たくさん」と比べると、使用割合は少ないものの、まったく使用されないわけではない。BCCWJで収集したデータの中にも、次のように、動作の量を示している「たくさん」が見られる。

- (34) しばらく親同士で話していたが、子どもたちは本当に元気だ。「明日もたくさん遊ぶのだから、そろそろ眠ろう」と秋雪に頼みこみ、なおも遊ぼうとするのを抱きかかえて部屋に戻った。(加藤浩美 (2003)『たったひとつのたからもの 息子・秋雪との六年』文藝春秋)

- (35) 私はマキにくだらない冗談をたくさん言い、「手紙、たくさんちょうだいね」と言って笑ってみせた。マキは「たくさん書くわ」と約束した。マキからはその後、頻繁に手紙が送られてきた。(小池真理子 (2002)『夢のかたみ』集英社)

しかし、その内訳は、非能格自動詞と共起しているもの (34)、動作の「頻度」を表しているもの (35) がほとんどを占めている。「勉強する」は、典型的な非能格自動詞とも言えず (cf. 日本語を勉強する、英単語を勉強する)、次のように特定のコンテキスト (波線部) が示されない限り、「量」を示すことも難しい動詞であるように思われる。

(36)「そう？それはよかった。じゃあ、いつもよりたくさん勉強したご褒美に、好きなだけ食べていいよ」と、言われても、そんなわけにはいかない。(鹿住 槇 (2005)『半熟たまごのレジスタンス』集英社)

(32) (33) のような、学習者による「たくさん勉強する」の使用例は、母語話者の「規範」からずれたものとなる。しかし、動作の量を表す「たくさん」の使用が周辺的で、かつ、「勉強する」のようなタイプの動詞とはほとんど用いられないことだけが、学習者によるずれた使用に対する違和感として働いているわけではない。市川 (2010: 320) は、(32) (33) のような「たくさん」がもつ違和感について、次のように説明する。

2や8(筆者注: (32) (33) にあたる)に見られるように、「たくさん勉強する」は適切な日本語だろうか。日本語教師はしばしば学習者(特に初級レベルの)に「たくさん勉強してください」などと言うが、言ってから、子供っぽい日本語を話しているようで居心地が悪くなる。「たくさん」は基本的には数量的な多さを問題にする語で、勉強は量だけでなく質にもかかわるものであるため、違和感があるのかもしれない。

すなわち、動作の「量」の多さで、動作の「質」を規定することに違和感があるという見方である。このような傾向は、「たくさん」に限らず、量を表すその他の副詞の使用にも観察される。例えば、市川 (2010) では、「全部」にも、次のような「誤用」があることが指摘されている。「全部」は、「物事の総体」を表す副詞であり(飛田・浅田 2018)、(37) (38) のように使うと、ひらがなとカタカナの総体(37)、日本語の総体(38)を示すことになる。わからない程度や、話せる程度を示すためには、「全然」や「十分」のような副詞を使わなければならない。学習者には、程度を量で表してしまうという、一種の「規則性」が見受けられる。

(37) わたしはかんじのいみがたいわかりましたが、ひらがなとかたかなは

ぜんぶ (→全然) わかりませんでした。〈中国〉

- (38) 私は日本語を二年勉強したので、日本語がぜんぶ (→十分) 話せるというところまでは行っていない。〈タイ〉

しかし、このような、「規範」からずれた「たくさん」の使用は、特段、学習者の日本語に限られた話ではないようである。次の例のように、母語話者の使用にも、いわゆる「違和感」がある「たくさん」の使用が見られる。個人のブログや SNS においてよく観察される。

- (39) 今日もたくさんありがとう。

また元気で会えるの楽しみにしてるね 🍷

(2022/9/3、https://twitter.com/826aska_STAGE/status/1566031817907798016)

- (40) .

たくさん たくさん ありがとうございます。

本当に本当にありがとうございます。(後略)

(2018/9/17、<https://twitter.com/imotodesse/status/1041341055822712832>)

「[大勢の観客に] たくさん (来てくれて) ありがとう」や、「コメントをたくさんありがとう」のように、主体や対象の量を示していることが、コンテキスト、または構文において示されている場合は、規範的な「たくさん」となる。しかし、(39) (40) に示すような「たくさん」は、コンテクスツ的にも構文的にも、主体や対象が読み取りにくく、(40) の「本当に本当にありがとうございます」が続くことからわかるように、感謝の程度を表す「たくさん」として用いられている。このように、学習者の「誤用」は、母語話者の使用においても観察されることがある。

学習者の「誤用」の背景には様々な要因が潜んでいる (野田ほか 2001)。その中には、学習者独自の規則性に基づいて創造した「誤用」が含まれる。それは、ときに、母語話者において、「規範」からずれた「ゆれ」や「乱れ」として扱われるものと共通性をもつ。共通性が見られるということは、学習者によっ

て産出された「誤用」は、言語一般に観察されうる規則性に基づいた、理由があつての「ゆれ」「乱れ」であることを意味する。それが、のちの規範となる新しい表現を創造することへとつながる。

5. おわりに

本論文では、慣習性のなかから生じることばの創造性の背景を多角的に考察してきた。特に、ことばの創造性を反映した言語現象を論じる認知言語学、レトリック、第二言語習得の個別研究の知見をとりあげ、ことばの創造性へのアプローチとして、少なくとも次の3つがあることを論じた。第1に、言語主体の捉え方が有標である場合に、言語表現はより創造的に用いられる。捉え方が有標であるかどうかの1つの尺度は主観性であるが、ある言語表現の有標性は、その表現が用いられる構文環境によっても変わってくる。第2に、対話的なコミュニケーションのなかで、ある語が比喩的に用いられる場合に、ことばは創造的な意味を獲得する。比喩によって相手の認識、感情、行動に影響を与える効果を引き出すことが、ことばの創造的使用の動機づけになっている。第3に、ことばの用法のゆれからくる多様性のなかには、ことばの新しい用法の萌芽となるものが含まれている。学習者であれば誤りとみなされる表現と似たものを母語話者は使っており、そのような新奇的表現が新しいことばの用法を創り出していく。

以上のように、意味的な側面だけを取りあげても、ことばの創造性には少なくとも、捉え方の有標性、表現効果の強度、規範からの偏差が関与している。この3つの要因は相互に関係していると考えられるが、異分野間での研究の知見共有は進んでいない。本論文では、これまでの研究の知見を分野横断的に検討することによって、ことばの創造性の多面性を描き出すことを試みた。共通の研究対象を見出し、学際的にことばの創造性の性質を探求することが今後の課題として残されている。

付記

4節の内容の一部は、朴秀娟（2020）「日本語教育における『たくさん勉強してください』の使用をめぐる」『AATJ 2020 Annual Spring Conference』（オン

ライン開催、2020 年 3 月 19 日) に基づいている。

文献

- Bates, Benjamin R. (2020) The (in)appropriateness of the WAR metaphor in response to SARS-CoV-2: A rapid analysis of Donald J. Trump's rhetoric. *Frontiers in Communication* 5: 1–12.
- Boeynaems, Amber, Christian Burgers, Elly A Konijn, and Gerard J Steen (2017) The effects of metaphorical framing on political persuasion: A systematic literature review. *Metaphor and Symbol* 32(2): 118–134.
- Brugman, Britta C., Christian Burgers, and Gerard J. Steen (2017) Recategorizing political frames: A systematic review of metaphorical framing in experiments on political communication. *Annals of the International Communication Association* 41(2): 181–197.
- Brugman, Britta C., Christian Burgers, and Barbara Vis (2019) Metaphorical framing in political discourse through words vs. concepts: A meta-analysis. *Language and Cognition* 11(1): 41–65.
- Burgers, Christian, and Kathleen Ahrens (2020) Change in metaphorical framing: Metaphors of TRADE in 225 years of State of the Union Addresses (1790–2014). *Applied Linguistics* 41(2): 260–279.
- Burgers, Christian, Elly A Konijn, and Gerard J Steen (2016) Figurative framing: Shaping public discourse through metaphor, hyperbole, and irony. *Communication Theory* 26(4): 410–430.
- Cameron, Lynne (2011) Metaphor in prosaic and poetic creativity. In: Joan Swann, Rob Pope, and Ronald Carter (eds.) *Creativity in language and literature: The state of the art*, 68–82. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Carter, Ronald (2016) *Language and creativity: The art of common talk*. Second edition. London: Routledge.
- Charteris-Black, Jonathan (2006) Britain as a container: Immigration metaphors in the 2005 election campaign. *Discourse & Society* 17(5): 563–581.

- Chomsky, Noam (1964) *Current issues in linguistic theory*. The Hague: Mouton.
- Corbett, Edward P. J., and Robert J. Connors (1999) *Classical rhetoric for the modern student*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- Dancygier, Barbara, and Eve Sweetser (2014) *Figurative language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Entman, Robert M. (1993) Framing: Towards clarification of a fractured paradigm. *Journal of Communication* 43(4): 51–58.
- Gamson, William A., and Modigliani, Andre (1989) Media discourse and public opinion on nuclear power: A constructionist approach. *American Journal of Sociology* 95(1): 1–37.
- Gibbs, Raymond W. Jr. (1994) *The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldberg, Adele E. (2019) *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton: Princeton University Press.
- Hendricks, Rose K, Zsófia Demjén, Elena Semino, and Lera Boroditsky (2018) Emotional implications of metaphor: Consequences of metaphor framing for mindset about cancer. *Metaphor and Symbol* 33(4): 267–279.
- Hertog, James K., and McLeod, Douglas M. (2001) A multiperspectival approach to framing analysis: A field guide. In: Stephan D. Reese, Oscar H. Gandy, and August E. Grant (eds.) *Framing public life*, 157–178. London: Routledge.
- Jakobson, Roman (1960) Closing statement: Linguistics and Poetics. In: Thomas Sebeok A. (ed.) *Style in language*, 350–377. Cambridge: The MIT Press.
- Jones, Rodney H. (2016) Creativity and discourse analysis. In: Rodney H. Jones (ed.) *The Routledge handbook of language and creativity*, 61–77. London: Routledge.
- Kecskes, Istvan (2016) Deliberate creativity and formulaic language use. In Keith Allan, Alessandro Capone, and Istvan Kecskes (eds.) *Pragmemes and theories of language use*, 3–20. Cham: Springer International Publishing.
- (2020) Linguistic creativity in English as a lingua Franca. *Studies in Pragmatics* 22: 1–13.

- Komatsubara, Tetsuta (2023) Framing risk metaphorically: Changes in metaphors of COVID-19 over time in Japanese'. In: Annelie Ädel, and Jan-Ola Östman (eds.) *Risk discourse and responsibility*, 63–85. Amsterdam: John Benjamins.
- (to appear) Framing and metaphor in media discourse: Multi-layered metaphorical framings of the COVID-19 pandemic in newspaper articles. In: Chris Shei and James Schnell (eds.) *The Routledge handbook of language and mind engineering*. London: Routledge.
- Kövecses, Zoltán (2010) *Metaphor: A practical introduction*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2000) When subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in sentence-focus constructions across languages. *Studies in Language* 24(3): 611–682.
- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and speculations on subjectivity. In: John Haiman (ed.) *Iconicity in syntax*, 109–150. Amsterdam: John Benjamins.
- (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5–38.
- (1998) On subjectification and grammaticization. In: Jean-Pierre König (ed.) *Discourse and cognition: Bridging the gap*, 71–89. Stanford: CSLI Publications.
- (1999) Losing control: Grammaticalization, subjectification, and transparency. In: Andreas Blank and Peter Koch (eds.) *Historical semantics and cognition*, 147–175. Berlin: Mouton de Gruyter.
- (2006) Subjectification, grammaticalization, and conceptual archetypes. In: Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various paths to subjectivity*, 17–40. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lyons, John (1982) Deixis and subjectivity: Loquor ergo sum? In: Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.) *Speech, place, and action*, 101–124. New York: John

Wiley and Sons.

Leech, Geoffrey N. (1969) *A linguistic guide to English poetry*. London: Longman.

Maybin, Janet (2016) Everyday language creativity. In: Rodney H. Jones (ed.) *The Routledge handbook of language and creativity*, 25–39. London: Routledge.

Musolff, Andreas (2017) Truths, lies and figurative scenarios: Metaphors at the heart of Brexit. *Journal of Language and Politics* 16(5): 641–657.

Olza, Inés, Veronika Iraide Koller, Paula Pérez-Sobrino Ibarretxe-Antuñano, and Elena Semino (2021) The #ReframeCovid Initiative: From Twitter to society via metaphor. *Metaphor and the Social World* 11(1): 98–120.

Pope, Rob, and Joan Swann (2011) Introduction: Creativity, language, literature. In: Joan Swann, Rob Pope, and Ronald Carter (eds.) *Creativity in language and literature: The state of the art*, 1–22. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Semino, Elena (2011) Metaphor, creativity and the experience of pain across genres. In: Joan Swann, Rob Pope, and Ronald Carter (eds.) *Creativity in language and literature: The state of the art*, 83–102. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

——— (2021) “Not soldiers but fire-fighters”: Metaphors and Covid-19. *Health Communication* 36(1): 50–58.

Semino, Elena, Zsófia Demjén, and Jane Demmen (2018) An integrated approach to metaphor and framing in cognition, discourse, and practice, with an application to metaphors for cancer. *Applied Linguistics* 39(5): 625–645.

Sobrino, Paula Pérez, Jeannette Littlemore, and Samantha Ford (2021) *Unpacking creativity: The power of figurative communication in advertising*. Cambridge: Cambridge University Press.

Swann, Joan, Rob Pope, and Ronald Carter. (eds.) (2011) *Creativity in language and literature: The state of the art*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Tewksbury, David, and Dietram A. Scheufele (2020) News framing theory and research. In: Mary B. Oliver, Arthur A. Raney, and Jennings Bryant (eds.) *Media effects: Advances in theory and research*, 51–68. Fourth edition. London: Routledge.

Traugott, Elizabeth C. (1982) From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In: Winfred Lehmann, and Yakov Malkiel (eds.) *Perspectives on historical linguistics*, 245–271. Amsterdam: John Benjamins.

——— (1989) On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65(1): 31–55.

——— (1995) Subjectification in grammaticalization. In: Dieter Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and subjectivization in language*, 31–54. Cambridge: Cambridge University Press.

——— (2003) From subjectification to intersubjectification. In: Raymond Hickey (ed.) *Motives for language change*, 124–139. Cambridge: Cambridge University Press.

——— (2010) Revisiting subjectification and intersubjectification. In: Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.) *Subjectification, intersubjectification and grammaticalization*, 29–70. Berlin: Mouton de Gruyter.

Traugott, Elizabeth C. and Richard B., Dasher (2002) *Regularity in semantic change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tusting, Karin, and Uta Papen (2008) Creativity in everyday literacy practices: The contribution of an ethnographic approach. *Literacy and Numeracy Studies* 16(1): 5–23.

Wicke, Philipp, and Marianna M Bolognesi (2020) Framing COVID-19: How we conceptualize and discuss the pandemic on Twitter. *PLoS ONE* 15 (9): e0240010.

池上嘉彦 (2006) 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉—」『言語』35(5): 20–27.

——— (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編)『主観性と主体性』49–67. 東京: ひつじ書房.

市川保子 (2010)『日本語誤用辞典—外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント—』東京: スリーエーネットワーク.

上原聡 (2016) 「ラネカーの subjectivity 理論における『主体性』と『主観性』—言語類型

- 論の観点から」中村芳久・上原聡 (編)『ラネカーの (間) 主観性とその展開』53-89. 東京: 開拓社.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 金澤裕之 (2008)『留学生の日本語は、未来の日本語—日本語の変化のダイナミズム—』東京: ひつじ書房.
- 金澤裕之・川端元子・森篤嗣編 (2021)『日本語の乱れか変化か—これまでの日本語、これからの日本語—』東京: ひつじ書房.
- 川口良・佐々木泰子 (1996)「日本人と日本語学習者の作文における副詞の発達過程に関する研究」『お茶の水女子大学人文科学紀要』49: 219-238.
- 小寺里香 (2001)「初級～中級学習者の発話にみられる副詞の使用について」『岐阜大学留学生センター紀要』2000: 76-89.
- 小松原哲太 (2016)『レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学—』京都: 京都大学学術出版会.
- (2022)「矛盾する比喩と社会的葛藤—日本語における『コロナ禍』の概念メタファーの不和—」『社会言語科学』25(1): 86-101.
- 小柳智一 (2022)「4種類の『主観』の用語法」早瀬尚子・天野みどり (編)『構文と主観性』33-52. 東京: くろしお出版.
- 土屋智行 (2020)『言語と慣習性—ことわざ・慣用表現とその拡張用法の実態—』東京: ひつじ書房.
- 塚田智冬 (2017)「日本語学習者の作文における副詞の使用状況に関する一考察—上級学習者と母語話者の論述作文の比較—」『日本語・日本文化研究』23: 67-80.
- 飛田良文・浅田秀子 (2018)『現代副詞用法辞典 新装版』東京: 東京堂出版.
- 仁田義雄 (2002)『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』東京: くろしお出版.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001)『日本語学習者の文法習得』東京: 大修館書店.
- 朴秀娟 (2020)「中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴—ストーリーテリングを中心に—」『日本語/日本語教育研究』11: 19-34.
- 本多啓 (2016)「Subjectification を三項関係から見直す」中村芳久・上原聡 (編)『ラネカーの (間) 主観性とその展開』91-120. 東京: 開拓社.

森雄一 (1998) 「『主体化』をめぐって」 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集 編集委員会 (編) 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 1143-1155. 東京: 汲古書院.

——— (2012) 「『風立ちぬ』における『客体化』表現をめぐって」 『成蹊國文』 45: 169-161.

山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』 東京: 大修館書店.

——— (2016) 『自然論理と日常言語—ことばと論理の統合的研究—』 東京: ひつじ書房.

渡辺史央 (2010) 「論述文に現れた副詞の分析—留学生と日本人学生の作文より—」 『京都産業大学論集 人文科学系列』 41: 77-92.

注

1 (3) は空間知覚（視覚）の例であるが、Langacker は知覚 (perception) と概念化 (conception) の並行性を重視し、その他の意味概念についても同様のプロセスが関わっていることを強調する。be going to が未来標識へと文法化したプロセス、たとえばモーダル動詞の多義性、所有動詞 have から完了アスペクト標識の発達、といった現象にも同じような主観化のプロセスが認められることを指摘している。詳細については Langacker (1990, 1999, 2006) などを参照されたい。

Subjectivity, figurativity, and variety around linguistic creativity

Tetsuta KOMATSUBARA, Sooyun PARK, and Yusuke MINAMI

Linguistic creativity has been studied in multidisciplinary research fields including theoretical and applied linguistics, stylistics, sociolinguistics, literary studies, communication studies, cultural studies, media studies, anthropology, and education. However, there is no agreement on the factors that motivate the creative use of language. This paper reviewed case studies of linguistic analysis of creativity and argued that linguistic creativity involves at least three factors: markedness of construal, rhetorical effect, and deviation from the norm. First, cognitive linguistic studies on personal pronouns in English reveal that a creative expression reflects marked cognitive construal involving subjectivity. Second, rhetorical studies on framing show that metaphors yield rhetorical effects to create a new perspective on communicative situations, which can lead to changes in cognition, emotion, and action. Third, research on Japanese-as-a-second-language learners points out that misuse by learners includes features of novel expression that may give rise to new uses by native speakers. Cognitive linguistics, rhetoric, and second language acquisition research have shared an interest in linguistic creativity, but few attempts have been made to integrate the knowledge acquired by individual studies. Future work will include empirical research focusing on a single linguistic phenomenon involving creativity from different theoretical angles, which will shed new light on the theory of linguistic creativity.

Keywords : creativity, cognitive linguistics, rhetoric, second language acquisition

キーワード：創造性，認知言語学，レトリック，第二言語習得